【国際学会トピックス】

アメリカ社会学会第87回年次大会に参加して

織　田　輝　哉

1．はじめに

アメリカ社会学会（American Sociological Association）の第87回年次大会は，1992年8月20日から24日までの5日間，ペンシルバニア州ピッツバーグ市で開催された。アメリカ社会学会は世界でも最大の規模を持つ国内学会であり，年次大会には国内大会であるにもかかわらず，海外からも多数の社会学者が参加する。そのような海外からの参加者のひとりとして大会に出席した者の見た大会の様子を報告する。

大会は，大きなコンベンションセンター（David Lawrence Convention Center）とその隣にあるホテルのホールの一部を使って開催された。この大会の最大の特徴は，その規模の大きさにあると思われる。まず，部会（Session）の数が371という膨大な数に上っている。実際に行われる報告数は千近くになるだろう（ちなみに，肥大化の問題が指摘される日本社会学会の場合でも，大会での報告数は二百数十件である）。この多数の報告を5日間で消化するためには，どうしても緊密なスケジュールにならざるを得ない。

2．大会の運営

そのため，会場として大小さまざまな大きさの部屋を多数もつコンベンションセンターが用意され，同時に十数の部会が並列的に進行していくという形をとる。また，午前8時半から午後6時半まで，2時間きざみで5つの時間帯に分け（そのため，昼休みの時間帯はない），朝から晩まで次々に報告が行われていく。また，午後6時半からの時間帯は，各種のパーティやセレモニーのスケジュールが組み込まれていて，要するに，会場では，1日中常時何らかのイベントが行われているということになる。

参加者の立場からすると，大会でどのようなことが行われているのか，全貌を把握するというようなことは初めから望めないことであり，プログラムを見ながら，自分が参加すべき部会をチェックして個人のスケジュールを作ることが必要になる。全ての時間帯にどこかの部会に出席しよう，などということは，興味のある部会がないこともあるし，また体力の消耗も考えれば，諦めざるを得ない。

また，この大会のもう1つの特徴は，各部会の運営の多様性であろう。各報告者が20分くらいずつ報告した後にコメンテーターが発言する，という通常の形態の部会のほかに，大会のテーマ（今回のテーマは，「社会学と社会の再構成」）に沿った報告を集めて行うテーマセッション，特定テーマの報告を集めた特別セッションなどがあり，またラウンドテーブルと呼ばれる部会では，参加者が丸いテーブルを囲む形であ

るテーマについて自由に討議する。さらに，ある本を取り上げて，著者と批評者が議論を行う書評セッション，報告者が会場の一角にプレゼンテーション用のポスターを張り出して，興味を持った人に説明をするというポスターセッションなど，多様な発表形態が取られている。また，ワークショップやセミナーと呼ばれる部会では，社会学教育法の研修や，社会調査・研究法等についてのレクチャーが行われる。大会参加者は，基本的にこれらの部会に自由に参加できるが，セミナーについては，別途料金が必要とされるものが多い。

また，夜には多数のレセプションとよばれるパーティが開かれるのも特徴的である。これは，参加者全般を対象としたものの他に，学生，留学生，新入会員等を対象にしたレセプションがそれぞれ開催され，さらにアメリカ社会学会のテーマ別に分かれた下部組織であるセクションが開催する，勧誘をかねたレセプションも開催される。これらは，社会学者の間のネットワークを広げていくうえで重要な役割をはたしているようである。

また，会長講演とそれに続く学会賞の授与式というのも重要なセレモニーである。教育，実践活動，博士論文，著作，等についての学会賞が授与され，授賞者がスピーチを行う姿は印象的であった。

3.　報告の内容について

まず，全体的な傾向としていえるのは，「合理的選択理論」に関連する報告の多さである。会長講演を行った，シカゴ大学のコールマン教授のテーマも「社会の合理的再構成」というもので，社会学理論と社会変動との対応関係を指摘し，意図的に構成される組織が中心となる現代社会での，合理的選択理論の重要性を強調するものであった。また，合理的選択関連の部会では，経済学者のゲイリー・ベッカー教授や，企業組織論のオリバー・ウィリアムソン教授が，報告を行っていた。合理的選択が対象とするものもさまざまであり，社会学の理論的問題から，社会運動，麻薬中毒，企業組織等，多岐にわたるもので，かなり応用研究が増えているという印象を受けた。

その他，私が出席した部会の内容を雑駁ではあるが，簡単に触れておこう。

・「社会主義崩壊の理論的意味」

社会主義の崩壊をどのように理論的に意味づけるか，というテーマの報告を集めた部会で，マルクス理論はある意味では，今日の社会主義の崩壊を予見するものであったとする報告，公共財供給へのフリーライダー問題として社会主義崩壊をとらえる報告，社会主義政権の崩壊とマルクス主義の破綻との間には一線を画すべきであり，社会主義理論の再構成の必要性（特に，下部構造絶対主義の排除）を説く報告などがあった。

・「ノンプロフィットセクターと組織」

ノンプロフィットセクターを組織論的に分析することをめざす部会で，公的領域と私的領域のはざまの領域としてノンプロフィットセクターをとらえ，私的には供給されないが，情報コストなど取引費用の問題で公的に供給しようとするとどうしても過剰あるいは過少供給になってしまうような財の供給を担うものととらえる報告，東欧における社会主義政権の崩壊にはたしたノンプロフィットオーガニゼーションの役割を検討する報告，ノンプロフィットオーガニゼーションに対する質問紙調査を行って，組織

の発展に寄与するのはどのような要因かを分析する報告が行われた。

・「社会政策と社会計画：分析の目的と合理性」

社会政策の計画論的視点からの分析を集めた部会。社会政策の目的が，現実を表しているというよりはむしろ，象徴的な意味を持っているということを，コミュニティメンタルヘルスを例に取って示す報告，政策とアカデミックな社会計画論との結びつきが欠けている状況で，適切なアプローチを検討する報告などがあった。

・「エイジングの社会学」

ベビーブーム世代が老齢期に入ることに伴う問題を取り上げていた。「強い老人」という現実とはかけ離れたイメージがステレオタイプ的に若い世代に抱かれているということを，学生対象の調査によって明らかにした報告，ベビーブーム世代は，これまでの世代とは生活様式や家族形態が違うため（たとえばステップチルドレンが多いなど），この世代の退職後の生活については，これまでとは異なった対処の方法を考えていく必要がある，という報告などが行われた。

実際には，まったく顔を出せない部会の方が圧倒的に多かったわけであり，それらの部会の内容については，プログラムから知るしかないが，これによれば，報告内容は，きわめて多岐にわたっており，アメリカに固有の社会問題（たとえば人種問題など）や，環境問題，性など一般に注目を集めているテーマについての部会も多く開かれていた。

全体を通じていえることは，ASAの年次大会は，報告を通じて，全体としてのなんらかの方向性が見えてくるというような性質の大会ではなく，むしろ，巨大な受け皿が準備されており，そこに各参加者が集って，自分のもっている興味・関心に従って自由にスケジュールを設定し，発表を行うなり，報告を聞いたり，レクチャーを受けるなりして，情報収集・意見交換・ネットワーク作りを行う場，と見ることができよう。

4. おわりに

以上述べてきたように，ASAの年次大会は，きわめてオープンな大会である。一定の参加費を支払うだけで，だれでも参加することができる。事前の登録等も必要なく，当日受付に申し込むだけでよい。その意味では，日本からも参加することは容易である。

なお，アメリカ社会学会の年次大会は，今後次のようなスケジュールで開催される。

1994年

8月5～9日

Westin Bonaventure and Los Angeles Hilton, Los Angeles, California

1995年

8月19～23日

Washington Hilton & Towers, Washington, D.C.

1996年

8月10～14日

Hyatt Regency Chicago, Chicago, Illinois

連絡先は，

American Sociological Association
1722 N Street, N. W.
Washington, D. C. 20036-2981
(202)833-3410

（おだ・てるや　社会保障研究所研究員）